

飯能河原のアオサギ

飯能市立博物館 学芸職員 岸 裕介



写真1 アオサギ（矢風堰にて）



写真2 首をS字に折りたたんで飛翔するアオサギ



写真3 魚を狙うアオサギ
（写真提供：河合裕氏）

漢字で書くと「青鷺」または「蒼鷺」。英語では「Grey Heron（灰色サギ）」です。実際の鳥を見ると青というよりは確かに灰色に近い色合いです。写真1は、飯能河原を流れる入間川の少し下流の矢風堰で撮影しました。背中側は地味な灰色ですが、目の上から後方へ引かれた濃紺のラインがアクセントとなっていて、頭の後ろからおくれ毛のように垂らした長い冠羽もおしゃれな濃紺です。首にも濃紺のまだら模様をあしらひ、羽ばたくと濃紺に縁どられた風切羽（かぜきりばね）が現れます。くちばしと足回りは黄色系ですが、繁殖期になると鮮やかな婚姻色となって赤みが増します。胸と背にはシラサギと同じく飾り羽があります。そのふわっとした抜け感は、まるで美容室でセットしたエアリーヘアのようです。

くちばしの先から尾羽の先までの全長は90cmを超える大型の鳥ですが、ほかのサギ類と同様にくちばしと首と足が長くて、スマートなスタイルをしています。実際に胴体は小さく軽量にできていて、大きな翼ではばたいて直線的に飛ぶ姿はとても軽やかです。飛行中に首を伸ばすツルと違い、サギ類は写真2のように首をS字に折りたたんで飛ぶのが特徴です。

そんな優美な姿のアオサギは、アジアからヨーロッパ、アフリカと広く生息し、日本でも主に留鳥（渡りをせず一年中同じ地域にいる鳥）として全国の水辺に生息しています。肉食性で魚類、両生類、爬虫類を捕食し、ときには鳥類や小型の哺乳類も狙います。長い足ですくくと立ち、じっと水面を見つめて狙いを定め、長い首をS字にかがめると電光石火のごとく首を伸ばし長くくちばしで獲物を捕らえます。ねぐらは通常、高木の枝の上で、群れ（コロニー）をつくって休みます。いわゆる「サギ山」です。よく食べ、よくフンをするので、人間にとっては漁業被害やフン害、そして鳴き声に悩まされることもあります。鳴き声は大きく、飛翔時は甲高く「グア」、地上では姿に似合わないしわがれた声で「グアッ」、「ゴアア」などと鳴きません。

アオサギは警戒心が強く、近づいて観察することは難しいですが、水辺や木の上など見晴らしのよいところでじっとしていることが多いので、双眼鏡などがあればだれでも観察しやすい鳥です。飯能河原右岸の大きなモミの木にもよく止まっているので博物館からも見るすることができます。翼を広げてくれたら一枚一枚の羽根の様子も観察してみましょう。写真3のアオサギが広げた濃紺の風切羽は、左右非対称の形をした長さのある羽で飛翔時に揚力や推力を得る重要な役割を果たします。

アオサギの気品ある姿と精悍な顔立ちは見ていると飽きません。じっと見ていると、黄色と黒の瞳に見つめ返され、ぎゅっと結ばれた口元が「君たちはどう生きるか」と問いかけている気がしました。